関連学会印象記

第48回日本心臓病学会学術集会

中谷 敏*

ミレニアム学会

国立循環器病センター北村惣一郎院長を会長として平成12年9月11日から13日まで大阪で開かれた第48回日本心臓病学会学術集会に出席した．日本心臓病学会は1970年に臨床心音図研究会として発足し，その後1982年に臨床心臓図学会，1987年に日本心臓病学会と発展を遂げてきた．本年はミレニアム2000年であると同時に日本心臓病学会創立30周年にもあたり，それにふさわしく会場は4月にオープンしたばかりの大阪国際会議場および隣接したリーガロイヤルホテルで行われた．学会の規模も年々大きくなり今年は通常の演題発表以外に，6つのサンデーセッション，14のモーニングセミナー，18のランチョンセミナー，12のサテライトシンポジウムが行われ，招請講演を行った5人を含む計20人の外国人が招待されていた．残念なことに初日から台風14号の影響で東海地方を中心に記録的な豪雨が降り，そのために多数の新幹線が運休，時には関西国際空港への連絡橋が閉鎖されるなど悪条件の中でのスタートであった．また新幹線は米原－豊橋間で運行が停止され数万人が車内に缶詰にされ，ために参加者のみならず演者，座長の未到着，急遽変更が多数出現するという未曾有の学会となったが，約1400題の演題申し込みに対し採択率が62％と抑えられたことからもわかるように演題のレベルはかなり高くあちこちで活発なディスカッションが繰り広げられた．種々の学会が氾濫し，時には低レベルの演題を何度も聴かされる身としては，今後も採択率を押さえ気味にしてでもレベルを維持していただきたいと考えた次第であった．また本学会はもともと臨床心音図研究会から端を発したことからわかるように内科医主体の学会であったが，今回は外科医が会長をつとめられたため外科系のプログラムがよく充実し，外科医の参加も多く筆者ら内科医にとっては常日頃知ることのない知識を得ることができたいへん有益であった．筆者も通常の他の学会では得られない知識を得るべく努めて外科関係のセッションを聴講するようにした．以下，日をおって思いつくままに聴講した印象を書いてみたい．

学会前日

例年通り学会前日にはアメリカ心臓病学会（ACC）とのジョイントシンポジウム（JCC-ACC ジョイントシンポジウム）が行われた．このシンポジウムは年々出席希望者が増え，本年はついに参加人数を大幅に制限したとのことであった．今回は，日米各4人ずつの演者がそれぞれ，心房細動，カテーテルアブレーション，核医学による心筋 viablity 評価，高脂血症について講演し ACC/AHA ガイドラインをわが国でどう活かすかという問題が討議された．筆者の私的感想であるが，どうも日本の医学はその実力の割に正当に評価されず欧米の医学から仲間はずれにされているような気がする．今後もこういう機会を利用してどんどん欧米の仲間入りをしていっていただきたいものである．なお本会に出席予定であった ACC 会長 Dr. Beller（University of Virginia，USA）はご家族のご病気のため急遽来日をとりやめられ，かわりに Dr. Zipes（Indiana University，USA）がこのジョイントシンポジウムおよび学会初日の招請講演を行われた．午後からはサンデーセッションの中の「大動脈瘤」に出席したが，大動脈解離に対するステントグラフトの現況を知ること

*国立循環器病センター心臓内科

Presented by Medical*Online

写真　懇親会でのスナップ
左より大会長北村惣一郎先生，Noel L. Mills 先生（Tulane University, U.S.A.），Douglas P. Zipes 先生（Indiana University, U.S.A.），Daniel S. Berman 先生（Sinai Medical Center, U.S.A.），Friedrich W. Mohr 先生（Universität Leipzig, Germany）．

ができ興味深かった．ステントグラフト留置術は現在はまだ外科医が施行しているが内科医が経皮的に行うのもそう遠くはないと感じられた．夜には多数の参加を得て懇親会が盛大に行われ，内科医外科医を含めあちこちで談笑の輪が広がった．本来，学問とは何の関係もない時間ではあるが，このような場での交流から次なる発展が期待される．筆者も他の施設の研究者と会話中に突然共同研究の話が持ち上がり大いに盛り上がった．

学会初日

筆者は「心臓移植：アジアの現状と ANOS を目指して」というパネルディスカッションを聴講したが，日本を除くアジア諸国が非常にアクティブに心肺移植を行い，また今後はアジア全体を一つのネットワーク（ANOS，Asian Network for Organ Sharing）で結び臓器移植を推進する時代が来ていることを知って感銘を受けた．またもや私感であるが，筆者は日本を除く今のアジア諸国，ことに韓国や中国には大きなエネルギーを感じている．医学の面で今はわれわれが優位に立っていてもこのまま行けばそのうち後塵を拝する時がくるのではないか，そういう思いもふとよぎった次第であった．

2日目

2日目には外科系の招請講演が二題ありDr. Mills（Tulane University, USA）が冠動脈バイパス術に関する講演を，またDr. Mohr（Universität Leipzig, Germany）が今後注目されるであろうロボット手術に関する講演を行った．また北村会長が元国立循環器病センター総長川島康生先生の座長で「動脈グラフトの面白さ」と題する会長講演を行われたが，外科医にありがちな単に手術手技や成績の話にとどまらず，血管というものに対して非常に深く考えられ十分基礎的検討もされた上でご自身の方法を練り上げられ臨床に活かされ，そしてすばらしい成績を上げておられることにたいへん感銘を受けた．また日本心臓病学会創立30周年を記念して創立者である坂本二哉先生による記念講演，その後座談会が行われたが，設立当時の諸先生方のご苦労のみならず熱気も手に取るように感じられ，興味深いこぼれ話もいろいろと伺うことが出来た．

3日目

最終日は筆者の専門とする心エコー法に関するセッションに出席した．Dr. Sutherland（University Hospital Gasthuisberg, Belgium）の招請講演では組織ドプラ法の技術を応用して心筋のストレイン，ストレインレートを非侵襲的に計測できること，ストレインレートは今までのグローバルな心機能ではなく局所の機能を知ることができ，また虚血の鋭敏な指標であることを示された．同じ分野で仕事をする筆者にとっていまだ論文になっていない最新の知識を惜しげもなく披瀝していただき非常に有益な講演であった．続いて「心エコー・ドプラ法の進歩」と題されたビジュアルワークショップに出席した．これは最近めざましい進歩を遂げている超音波テクノロジーをいくつか解説し，その有用性，限界，今後の展望をディスカッションしようとするワークショップであり大阪大学別府慎太郎，東京大学竹中克両先生の座長で筆

Presented by Medical*Online

者を含む演者8名が自己の研究成果を披露した．別府，竹中両先生の名座長ぶりが光るワークショップでありリラックスした中にも本質をそらさない的確なディスカッションが繰り広げられ，筆者には今後の超音波テクノロジーの進むべき方向がおぼろげながら見えたように感じられた．

そして閉会

かくして第48回日本心臓病学会学術集会は幕を閉じた．総括するに記録的豪雨のために出席者は例年より少なかったものの中身の濃い「いい学会」ではなかったかと思う．前述のように本学会は臨床心音図学会がその母体である．今後も設立者たちの熱き思いを胸に本学会がますます成長し世界と対等の立場に立ってものをいえる日々が来るように努力していきたいと思う．

Presented by Medical*Online